

涙を、よごれた着物のそで口でぬぐうと、リンは家に帰って財布さいふづくりを始めました。会津にいたころは、藩はんの上級武士じょうきゆうぶしの若奥様わかおくさまでしたから、帯おびはいくらか持つていました。そして、幼わかいころから習いおぼえた裁縫さいほうが役に立ったのです。きれいな帯を切つて作つた財布はよく売れました。うわさをきいて遠くから買いにくる人もいました。

山に桑くわの葉のあるうちは、桑の葉をとつてきて売つたり、財布を売つたりして食事代にあてました。そのほか、山からたきぎをとつてきたり米つき、炊事ずいじなども、リンの仕事でした。土地がやせていて、氣候のよくない斗南となんでは米がとれません。明治の政府に願ひ出て、ほんのわずかの米を救助米きゆうじゆまいとしてもらつて生活していたのです。

明治四年（一八七一年）十一月、夫の季昌すえまさがようやく許ゆるされて帰つてきました

